
もう届かない思い。

松田祐介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう届かない思い。

【Nコード】

N2810I

【作者名】

松田祐介

【あらすじ】

あらすじー？？？うーん。。。

とりあえずイントロダクションがとてつもなく堅苦しいねw頑張つて読んでくださいw全部読めばきっと感動してもらえenと思います。まあ感動する結末かどうかは教えませんがw

あらすじは、恋愛をする中で自己を確立していく主人公のお話。まあよみやわかるってw

彼女との出会い（前書き）

中身が堅苦しいので前書きはのびのびと書きたいものですよねと
りあえず中学生の心理を物語にしたいと思っています。ちなみに今
受験生なんですけど。。。こんなことしていいのかなあwwww

w

彼女との出会い

人間誰しも、自己の確立、俗にいうアイデンティティの認識には思春期なるもの、もしくは青春なるものが必要であるようだ。おそらく自分という生き物は平均的な高校生として数えられるであろう。故に僕もまた、それらの体験を得て自分という生き物を知っていた。

それは紛れもない　　恋だった。

小学五年生の頃、僕は思春期に入った。ふけは出るようになり、にきびも出た。何よりも変化したのは女性に対する意識だ。

それまではただのクラスメイトであった女友達が僕の中で姿を変えていく。それは彼女達自身の変化ではなく、ただただ僕の中でのみの変化だった。

周りの中学生の会話、映画に出てくる場面、ところどころにある情報がその「異性に対する認識の変化」によって徐々に理解できてくる。誰もが体験しうるだろう。戸惑いもすれば興味もわく。最初のうちは前者が圧倒的だが時が過ぎればその存在は消え行く。

ただ、ここからは、共感できる者、出来ない者に別れるであろう。僕は周りにそれを知られなくなかった。いや、それ以前に、僕は自分が変化していくことを信じたくなかった。高学年といえども自我の形成が完全になされていない小学生児童の身としては、自分が、姿の見えぬ何か恐ろしいものに取り付かれた思いがして、必死に抗うことで自己を保つことの出来る自分を以って正当化せざるをえなかった。

そんなことをいっても。やはり、子供は子供。自分の心のうちを明けるのが憚られただけであるかもしれない。

それは中学生になってもそうだった。

今となってわかることだが、同じクラスの友人がこそパソコン室でサイトを見ていて、僕が除くのを必死で隠していたが、あれはすでに彼らに新たな意識が芽生えていたのだろう。しかし当時の僕には何のことだかさっぱり分からなかった。

いや、分かっていたかもしれない。

ただ。何の理由をもってそのような破廉恥なサイトを好き好んでみるのかは謎であった。存在だけを知っていた。

そうするとどうなるか。自分の中でそういった部類の事柄は「罪の意識」の中に入る。故に「自分の心のうちを明けるのが憚られただけであるかもしれない。」という状態が中学生になっても続いたのだろう。

僕の中学生生活はわりと普通だった。記憶力がいいわけではなかったが、わりと計算は速いほうだ。百マス計算という算数ゲームではよく一位の争いをしたものである。中学生になってもそれは変わらず、社会や国語はあまりよくはないが、勉強が出来ない子供ではなかった。

中学生の頃の偏差値という奴は大体六十前後であった。兄が勉強をあまりせず、本気で親を泣かせたことがあり、それを見た僕は母を悲しませたくないと思い、勉強に励んでいた。器用でなかった僕は勉強の仕方がいまいち分からず、勉強量の割に学力は伸びなかった。そんな姿を哀れに思ったのか、親は僕を塾に入れてくれた。今までうやむやになっていたところなどを復習することが出来、英語に関してはもはや模試で八割をきらなくなっていた。数学も学校のテストのレベルならほぼ満点を取れるようになった。国語や社会はというと、ぼちぼちであった。さすがの塾でも国語の読解力をつけさせるためには文章をおおく読ませることしか出来なかった。しかしその方法では僕のように国語に苦手意識を持っている生徒はそれが出

来るようにならない。しかし高校に入ってキャリアのある教師に教わって、ほとんど国語の問題も解けるようになってきてはいるが。社会は少しは上がったのかもしれない。模試の前日までに三日間で社会の参考書を一冊終わらせた。しかしそれでも大体模試の成績は六割。もともと興味のないことを覚えるというのが無理な話だ。しかし高校生の今となつては、ある程度社会科に興味は持てている。日本史にはいまだに苦手意識があるので、いや、興味がないので、世界史を専攻しているのだが。

中学生ともなると異性に対する興味をあからさまに示していく輩も現れてくる。僕は彼らに対して嫌悪感を抱くと同時に憧れも抱いていた。自分自身に正直になれることが彼らには出来ている、そう思ったのかもしれない。しかし僕にはまだその意識は「罪の意識」の範疇であつた。故にあえて交わろうとはしなかつたのである。

中学生生活はわりと普通であるといったが、僕はそこに純粹さも含まれていた。いやちがう。純粹そうに振舞っていた。内と外との顔の違いに戸惑いと嫌悪感はあるが、自己の内面を明示することのほうがよく思ふことであるとき思つていた。

僕は「純粹なほうの人間」として皆に認識され、僕はそれに納得していた。名誉なことだと思つた。何故ならそこには負の影がないからだ。自分に正直になることの作り出す光は同時に影をも作り出すのである。僕はその光を打ち消すほどの強い光を持ってその小さな光をさえぎつた。その光が影を作ろうとも、それは内面に伸びる影であつて、僕の許容範囲にとどまるのだ。正当化されたその影はもはや負のそれではなかつた。

光に対して影を作り出す「思春期」という塊は自己の内に影を置くことでひとまず落ち着くのだった。

中学三年の春。

新たなクラス替え。とりあえずは同じ部活動の仲間とつるみ、日本人特有の共同体の構成期間に入る。三日ぐらいあれば三十のクラスメイトのうち男子十五名にはしゃべりかけられるぐらいの親密さにはなれる。女子は後々仲良くなつていけばいいや、そう思っていた。

僕の中学校は男子の隣は女子というシステム。今から考えればなかなか喜ばしいことだが後の祭りだ。最初は出席番号で並んでいた机だったが席替えをして席順が変わった。そして、左隣に座ったのが僕の知っている女だった。

「あ！松田じゃん！」

そう。僕の名前は松田。松田祐介。どこにでもいそうな名前だ。そんな僕に話しかけてきたのは小学生のころからよく遊んだ女友達、高岸だ。

「おう！高岸！お前隣だとつるさいよな。」

「は？松田のほうがつるさいでしょ。」

なんのひねりもない、落ちもない中学生のやり取りが今では懐かしく思える。

高岸、中学生の頃にはあまり思わなかったが今思うと、可愛くないとも思えない。顔の形も部品の一つ一つも整った場所に配置されている。だれもが「美人」と言う顔というのは、案外それだけのことで作られるのだ。漫画家に「普通の女を書いて」といったときほぼ「美人」がかかれるのと同じ原理だ。普通が一番美人なのだ。

しかし当時も可愛くないとは思っていなかった。だから僕は高岸の隣で大いに喋り捲った。「お前隣だとうるさいよな。」という僕の発言が「は？松田のほうがうるさいでしょ。」と返されたが、しっかりそのとおりだった。

三日ほどたてば授業が始まる。数学の時間だった。教師が授業の始めに小テストなるものを行った。僕はこの頃すでに塾で勉強していたので満点を取った。二、三問の簡単なテストだが。

高岸はあまり勉強が出来るほうではなかったのであまりできていなかった。僕は内心誇ってはいたが、「どんまいどんまい。」などと自慢げにならないようなニュアンスで発言した。僕は自分の学力を誇示したり人を嘲ったりするような空気の読めない男でもなかったし、単純な人間でもなかった。女性の心はなかなかセンシティブなものであると若いながらも悟っていた。

僕はその瞬間にクラスの中で「出来る奴」という認識がなされた。そしてその時だった。

「松田君って頭いいの？」

右斜め前に座っていた女子「荒川静香」が振り返ってそう発言した。もちろん僕にはない。高岸だ。高岸と荒川とは同じバトミントン部で一二年と仲良くしてきたのだろう。

「やばいよ？天才だよ？」と高岸。

天才って……。そうでもないけど。

頭がそれほど良くない人から見ると。偏差値六十の人も七十の人も皆天才なのだ。僕が見る偏差値七十の人と八十の人が同じ天才だと思えるのと同じなのだろうか。

とにかく僕はクラスで天才になった。そして、これが僕と荒川との最初の出会いだった。

彼女との出会い（後書き）

全部読んでくれたのかな？だとしたら君は勇者だよねwでも君を失望させたりはしないよ！きっと楽しませて見せる！応援宜しく

ちなみに今日、本当にバナナの皮でこけるかなあって思って実験したらこけたw w wあれうそじゃないよ？いやまじでw w wやってみようw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2810i/>

もう届かない思い。

2010年10月9日23時18分発行